

看護教育における I B L 学習方法の効果の実証的検討

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター

看護教育において、自己教育力 (self-directed learning) の育成が打ち出され、自ら課題を求め探求する力の育成を目標とし、クリティカルシンキング (批判的思考) の思考様式や態度 (探求力、決断力、偏見のない見方) の育成に効果があるとされているチュートリアル教育の導入が盛んになってきている。

しかし、これらの教育効果に関する研究については、学習効果を論じる尺度の多くに適切でないものが用いられていること、さらに、横断的研究が大半であり、個人毎の変化を測定する縦断的研究が少ないことが指摘されている。

そこで今回は、学習効果の評価研究の積み上げをねらって、チュートリアル学習法の一つである I B L (Inquiry Based Learning) の教育効果を、自己方向付け学習の尺度とされる日本語版 S D L R S (Self-Directed Learning Readiness Scale) を用いて縦断的に測定し、その変化を検討した。

A 看護短大の 2003 年度 2 回生、2004 年度 3 回生の学生を対象として、2004 年 1 月の 2 回生の成人看護学講座と、3 回生で通年にわたり領域ごとに実施されている臨地実習 (導入のための「学内学習」と病院での「臨地学習」とに区分される。) のうちの、内科、外科の学内学習において、グループ毎に I B L 学習を実施し、その前後に日本語版 S D L R S 質問紙による調査を行った。また、比較のため、臨地学習 (IBL 未実施) の実施前後にも調査を行った。

調査実施に際しては、学部及び大学の倫理委員会の承認を得るとともに、調査対象の学生に対しては、研究目的・方法・データの保護・自由意志に基づく権利等について文書を配り、かつ口頭で説明し、了解を得た上で実施した。

実施の結果、IBL の実施時期や実施領域が異なっているにもかかわらず、すべてのグループにおいて、IBL 実施後は S D L R S の平均値が上昇した。学生個人毎にみると、延べで 63 % (58 人 / 92 人)、実数で 83 % (44 人 / 53 人) の学生の測定値が上昇した。

一方、臨地学習を介した測定値の変化では、臨地学習後に平均点が上昇したグループと下降したグループがあった。

さらに、総得点の変化と S D L R S を構成する 7 つの各因子の得点との関係を、標準偏差を基準にした 3 つ群 (低得点群、標準群、高得点群) に分けてみると、高得点群においては、IBL の介入により総得点は上昇したが、因子 1 の得点は下降し、因子 2 「基礎学習技能の活用能力」の得点が上昇した。一方、低得点群においては、IBL の介入を重ねる毎に、総得点と因子 1 の得点が上昇した。

このようなことから総合的に考察すると、IBL を実施していない臨地学習では平均値が下降したグループがあったが、IBL の実施したすべてのグループにおいては、平均値が上昇したこと、また 8 割以上の学生に測定値の上昇がみられたことから、IBL 学習は、学生の自己教育力を育てることに一定の効果があると判断できる。

また、因子別の分析から、低得点者は学習への愛着が元々低く、IBL の実施により愛着が高まるが、高得点者は学習への愛着が元々高いことから、IBL の実施により愛着は高まらず、学習技能の活用能力などが高まることが推測された。さらに、評価尺度としての S D L R S の活用については、総得点の変化が即時にわかりやすく読みとれ、因子別変化により自己教育力のどのような要因に影響を与えるかが洞察できることなどから、S D L R S の測定結果は対象者の個に応じた教育方法の検討の手がかりとなることが期待され

た。